

臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響

前田ひとみ¹⁾, 永田まなみ¹⁾, 大重和代²⁾
神谷文子³⁾, 杉谷かおる⁴⁾, 野田忍⁵⁾
太田黒梢⁴⁾, 西田陶子⁶⁾, 橋本智美²⁾
松本麻子⁶⁾

Effects of the Clinical Practice on Student Nurse's Concept of Nursing

Hitomi Maeda¹⁾, Manami Nagata¹⁾, Kazuyo Oosige²⁾
Fumiko Kouya³⁾, Kaoru Sugitani⁴⁾, Shinobu Noda⁵⁾
Kozue Ootaguro⁴⁾, Touko Nishida⁶⁾, Tomomi Hashimoto²⁾
Asako Matsumoto⁶⁾

Abstract In order to evaluate the effects of the clinical practice of student nurses on the formation of their concept of nursing, we investigated it in two different student nurses before and after their clinical practices. In addition, we also investigated whether student nurse's concept of nursing was different from that of the nurse of hospital in which they had clinical practice. The results were shown below. The role of nurse, the knowledge for nursing and the techniques for nursing were not different between the two student nurses groups. However, the character for an excellent nurse, such as an aptitude or an ability, were changed in the clinical practice process. The concept of student nurse was consistent with that of the nurses. These results indicated that the hospitals should be chosen carefully for the clinical practice of nurse students, because the difference of the hospital system and/or the hospital function may make them change their perception.

Key words : concept of nursing, nurse student, nurse, clinical practice

I. 緒言

医療技術の進歩によって疾患の複雑化や慢性疾患の増加がもたらされて、ケアがますます重要視されてきた。また医療や看護においては質に対する関心が高まり、医療の質や看護の質に関する議論や研究が数多く報告されている。それらの報告から、「よい看護婦に必要とされるもの」に対して看護婦が挙げたものは、優しさ、思いやり、良好な対人関係¹⁾、優れた実践能力²⁾、協調性・誠実性等³⁾であったが、患者は患者と向き合うこと⁴⁾、接遇のマナーのよさ等⁵⁾を挙げており、患者と看護婦の認識は必ずしも一致していないこと

が示されている。個々の看護者の看護に対する考えは、専門職業人として行動をとるための基盤となり、看護の方向性を決定する拠り所となるものである⁶⁾。そこで、我々は看護短大生の「人間」に関する概念の変化について調べた結果から、看護基礎教育における講義や実習によって「人間」の概念は量的にも質的にも変化しており、その変化は特に臨床実習によってもたらされることを既に報告した⁷⁾。また渡邊ら⁸⁾は看護短大生を対象に「看護」「病院」「患者」「看護婦」に対するイメージを調べた結果、各々のイメージは学年とともに変化しており、特に「看護」に対するイメージの変化が大きかったことを報告している。そして、この結果は実際に看護婦と接しながら臨床実習を行うことを通して、現実的なイメージが形成されていくことによってもたらされたのではない

1) 熊本大学医療技術短期大学部, 2) 三井大牟田病院
3) 福岡大学病院, 4) 熊本県立保健学院,
5) 久留米大学病院, 6) 熊本大学医学部附属病院

かと述べている。このように、看護学生にとって、臨地実習は、一般社会における看護の価値づけを再吟味して、専門職としての看護を再評価し、価値づけるきっかけになり⁹⁾、看護に対するイメージや考え方に変化をもたらすことが考えられる。

臨地実習という学習の場の特殊性は、学生と患者のみの関係だけでなく、看護教員、看護婦、さらには医師など看護を取り巻く様々な人間関係の中で展開されることである。そのような複雑な人間関係の中で、アイデンティティの確立が充分できていない看護学生と患者との関係は必ずしも円滑にいくとは限らない。看護学生はケアのプロセスを通して、学び経験することによって、自分自身を問い直し、自分の看護観を再発見したり再構築していく¹⁰⁾のである。実践の場で看護婦が学生にかかわることについて、宇佐見ら¹¹⁾はケアを主業務とする看護婦からケアを学ぶことに大きな意味があり、その際、看護婦はケアに対する看護婦の考えや思いを学生に伝えることが大切であると述べている。このことは、看護学生が臨地実習を通して看護観を再発見したり再構築する過程において、臨地実習施設の看護婦の影響を受けることを示唆している。

ところで病院の持つ機能や組織としての体制ならびに運営は看護婦の看護観に影響を及ぼすために、施設によって看護の質にも差が生じることが報告されている¹²⁾。このことはまた、臨地実習施設の機能や体制によって看護学生の看護観に影響がもたらされる可能性を示している。しかし、これまでの看護学生の看護のイメージ等を含む看護観に関する研究は一施設の学生を対象として縦断的に調査したものが多く、複数の施設を調べた研究は少ない。

今回我々は、看護学生の看護観の形成に影響する臨地実習の因子を明らかにするために、異なる病院において臨地実習を行っている二校の看護学生について臨地実習前後における看護観を比較し、さらに各臨地実習施設の看護婦の看護観と看護学生の看護観の相違を検討した。

II. 研究方法

1. 調査対象

看護学生はA短期大学看護学科3年生77名(以下、A学生)とB看護学校3年生27名(以下、B学生)を対象とした。また、看護婦はA学生、B学生が各々に主に臨地実習を行うC病院の看護婦442名(以下、C看護婦)とD病院の看護婦147名(以下、D看護婦)を対象にした。調査の有効回答者数(有効回答率)はA学生の実習前が56名(72.8%)、実習後が71名(97.5%)で、B学生は実習前が27名(100%)、実習後が26名(96.3%)であった。看護婦についてはC看護婦の有効回答者数(有効回答率)が383名(86.7%)で、D看護婦は120名(81.6%)であった。

看護学生の実習背景としては、各々の学校ともに1年生と2年生で基礎看護学実習を終え、3年生の4月から12月までの間に在宅看護論、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学の各実習がグループごとに展開された。また各臨地実習病院の主な特徴として、C病院は人口約66万人の県庁所在地にある特定機能病院としての機能を持った病院であり、D病院は人口約40,000人の第3次産業が中心の地域にあるベッド数290床の総合病院である。

尚、統計学的有意差の検定には χ^2 検定を用いた。

2. 調査方法

学生に対する調査は、後半の臨地実習開始直前(実習前)と全ての実習が終了した後(実習後)に同じ自記式質問紙を使って行った。また看護婦にも学生と同じ自記式質問紙を用いて、平成10年8月20日から9月22日の期間に調査を行った。

質問紙は看護の質や看護婦の評価に関する様々な文献を検討して①看護婦の機能②看護婦が関わる健康水準③看護婦に必要な知識④看護技術に求められるもの⑤看護婦に求められる資質⑥看護婦に求められる態度⑦看護婦に求められる素質⑧患者への対応⑨患者の訴えに対する対応⑩患者に安

心感を与える因子⑪患者の人権を守るために必要なこと⑫専門職として看護婦に要求されるもの⑬専門性を高めるために必要なことの13項目に分類した。そして各々の項目に5～7個の選択肢を設定し、その中から「看護婦として重要なこと」と思われる上位3個を選択してもらった。

Ⅲ. 結果

1. 臨地実習前後における学生の「看護婦として重要なこと」の認識についての変化

各々の学生について各項目の上位3位に挙げられた内容を実習前後で比較した。その結果、表1に示す通り、A学生は「看護婦が関わる健康水準」「看護婦に求められる資質」「看護婦に求められる素質」「患者に安心感を与える因子」の4項目に違いが見られた。

「看護婦が関わる健康水準」では実習前は上位3位の中に「社会復帰」があがっていたが、実習後には「終末期」が変わってあげられていた。「看護婦に求められる資質」は実習前の「温かさ」に変わって、実習後は「明るさ」があげられており、

「看護婦に求められる素質」では実習前の「献身的態度」が変わって、実習後には「ゆとり」があがられていた。そして「患者に安心感を与える因子」の実習前は「質問への確に答える」があがっていたが、実習後は「確実な技術」に変わっていた。また、「患者の人権を守るために必要なこと」に実習後は「患者から逃げない」が3位に加わっていた。

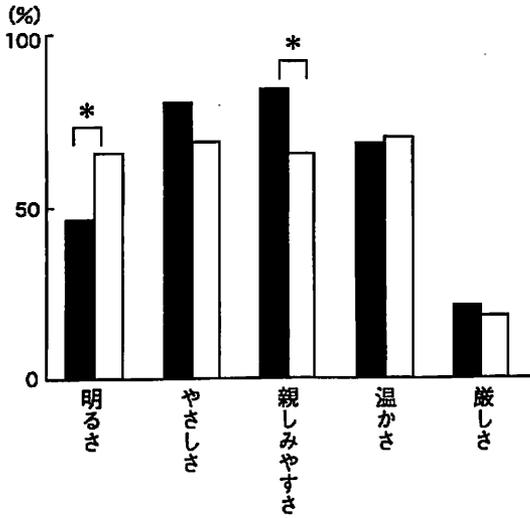
次に各々の項目の内容の割合について実習前と実習後を比較した。その結果、図1に示す通り、A学生では「看護婦に求められる資質」において「親しみやすさ」は実習後の方が実習前よりも χ^2 検定5%水準で有意に低く、「明るさ」は実習後の方が有意に高かった。また、「看護婦に求められる素質」の「親切心」は実習後の方が実習前よりも有意に低かった。

一方、B学生は表2に示す通り、「看護婦に求められる資質」「看護婦に求められる態度」「看護婦に求められる素質」「患者への対応」「患者の人権を守るために必要なこと」「専門職として看護婦に要求されるもの」の6項目に違いが見られた。「看護婦に求められる資質」

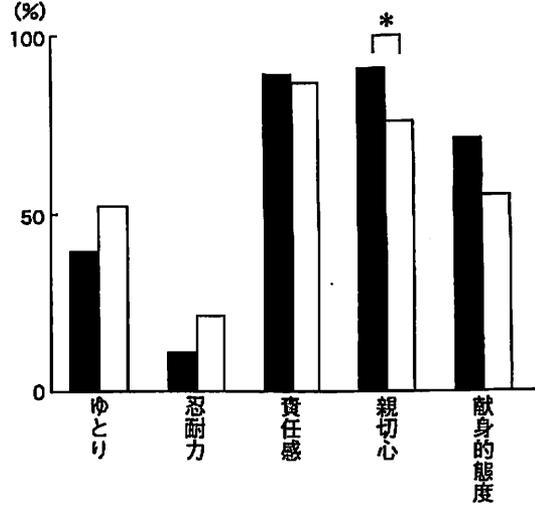
表1 A学生の実習前後における上位3位の比較

質問項目	順位	1位	2位	3位
看護婦の機能	実習前	身体的援助	心理的援助	患者教育
	実習後	身体的援助	心理的援助	患者教育
看護婦が関わる健康水準	実習前	疾病の治療、回復	健康の保持・増進/社会復帰	終末期
	実習後	疾病の治療、回復	健康の保持・増進	終末期
看護婦に必要な知識	実習前	看護の方法・技術	患者の心理理解	疾患
	実習後	患者の心理理解	看護の方法・技術	疾患
看護技術に求められるもの	実習前	安全性	安楽性	正確さ
	実習後	安全性	正確さ	安楽性
看護婦に求められる資質	実習前	親しみやすさ	やさしさ	温かさ
	実習後	やさしさ	明るさ	親しみやすさ
看護婦に求められる態度	実習前	冷静さ	感受性	誠実さ
	実習後	冷静さ	感受性	誠実さ
看護婦に求められる素質	実習前	親切心	責任感	献身的態度
	実習後	責任感	親切心	ゆとり
患者への対応	実習前	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない/首動に責任を持つ
	実習後	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない
患者の訴えに対する対応	実習前	非言語的訴えの確認	誠実に対応	忘れずに対応
	実習後	非言語的訴えの確認	誠実に対応	忘れずに対応
患者に安心感を与える因子	実習前	正確な情報把握/スキップ		質問への確に答える
	実習後	正確な情報把握	スキップ/確実な技術	
患者の人権を守るために必要なこと	実習前	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	平等に対応
	実習後	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	平等に対応/患者から逃げない
専門職として看護婦に要求されるもの	実習前	専門的な知識と技術	知識や技術の向上	人間への関心
	実習後	専門的な知識と技術	人間への関心	知識や技術の向上
専門性を高めるために必要なこと	実習前	評価をしながら実践する	人格と感性を磨く/学習の継続	
	実習後	人格と感性を磨く	評価をしながら実践する	学習の継続

1) 看護婦に求められる態度



2) 看護婦に求められる素質



■ ; 実習前 □ ; 実習後 * ; P < 0.05

図1 A学生の実習前と実習後で有意差のあった項目

る態度」, 「看護婦に求められる素質」では実習前は各々「親しみやすさ」, 「正直さ」, 「献身的態度」があがっていたが, 実習後は「やさしさ」, 「自己の健康管理」, 「ゆとり」が変わってあげられてい

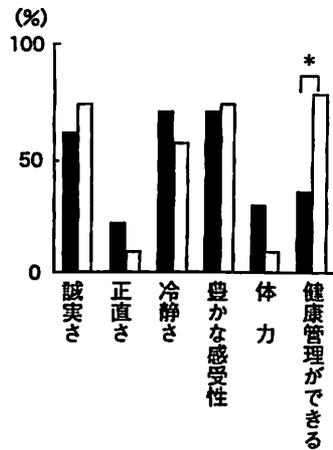
た。「患者への対応」では実習前は「言動に責任を持つ」があがっていたが, 実習後は「押しつけない」があがっていた。また、「患者の人権を守るために必要なこと」では実習前の「患者から逃

表2 B学生の実習前後における上位3位の比較

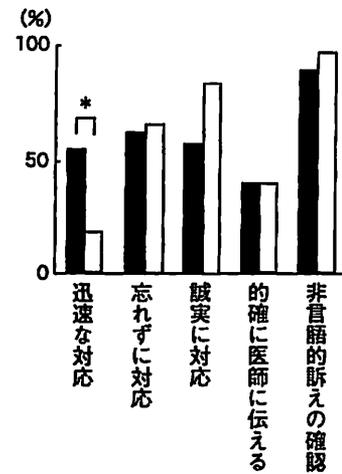
質問項目	順位	1位	2位	3位
看護婦の機能	実習前	身体的援助	心理的援助	患者教育
	実習後	心理的援助	身体的援助	患者教育
看護婦が関わる健康水準	実習前	疾病の治療・回復	健康の保持・増進	終末期
	実習後	疾病の治療・回復	健康の保持・増進	終末期
看護婦に必要な知識	実習前	患者の心理理解	看護の方法・技術	疾患
	実習後	患者の心理理解/疾患	看護の方法・技術	看護の方法・技術
看護技術に求められるもの	実習前	安全性	安楽性	正確さ
	実習後	安全性	安楽性	正確さ
看護婦に求められる資質	実習前	温かさ	明るさ/親しみやすさ	
	実習後	やさしさ/温かさ		明るさ
看護婦に求められる態度	実習前	冷静さ/感受性		正直さ
	実習後	自己の健康管理	誠実さ/感受性	
看護婦に求められる素質	実習前	責任感	親切心	献身的態度
	実習後	責任感	親切心	ゆとり
患者への対応	実習前	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	言動に責任を持つ
	実習後	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない
患者の訴えに対する対応	実習前	非目的訴えの確認	忘れずに対応	誠実に対応
	実習後	非目的訴えの確認	誠実に対応	忘れずに対応
患者に安心感を与える因子	実習前	正確な情報把握	スキンシップ	確実な技術
	実習後	スキンシップ	正確な情報把握	確実な技術
患者の人権を守るために必要なこと	実習前	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	患者から逃げない
	実習後	守秘義務の厳守	平等に対応	自己決定権の尊重
専門職として看護婦に要求されるもの	実習前	人間への関心	専門的な知識と技術	知識や技術の向上
	実習後	知識や技術の向上	自分の看護観を持つ	専門的な知識と技術
専門性を高めるために必要なこと	実習前	人格と感性を磨く	評価をしながら実践する	学習の継続
	実習後	評価をしながら実践する	人格と感性を磨く	学習の継続

臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響

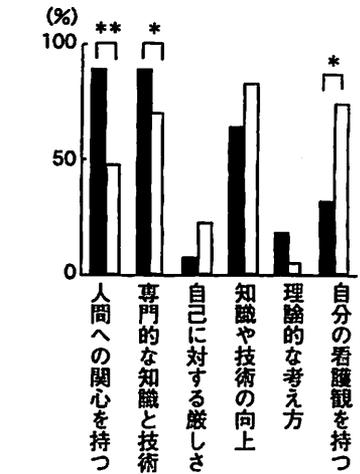
1) 看護婦に求められる態度



2) 患者の訴えに対する対応



3) 専門職としての看護婦に要求されるもの



■ ; 実習中 □ ; 実習後 * ; P<0.05 ** ; P<0.01

図2 B学生の実習前と実習後で有意差のあった項目

表3 A学生とC看護婦の上位3位の比較

質問項目	順位	1位	2位	3位
看護婦の機能	看護婦前	身体的援助	心理的援助	患者教育
	実習後	身体的援助	心理的援助	患者教育
看護婦が関わる健康水準	看護婦前	疾病の治療、回復	終末期	健康の保持・増進
	実習後	疾病の治療、回復	健康の保持・増進/社会復帰	健康の保持・増進
看護婦に必要な知識	看護婦前	疾患	患者の心理理解	看護の方法・技術
	実習後	看護の方法・技術 患者の心理理解	患者の心理理解 看護の方法・技術	疾患
看護技術に求められるもの	看護婦前	安全性	安楽性	正確さ
	実習後	安全性	安楽性	正確さ
看護婦に求められる資質	看護婦前	やさしさ/温かさ	やさしさ	明るさ
	実習後	親しみやすさ	やさしさ	温かさ
看護婦に求められる態度	看護婦前	やさしさ	明るさ	親しみやすさ
	実習後	誠実さ	冷静さ	感受性
看護婦に求められる素質	看護婦前	誠実さ	感受性	誠実さ
	実習後	冷静さ	感受性	誠実さ
患者への対応	看護婦前	責任感	親切心	ゆとり
	実習後	親切心	責任感	献身的態度
患者の訴えに対する対応	看護婦前	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない/自動に責任を持つ
	実習後	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない/自動に責任を持つ
患者に安心感を与える因子	看護婦前	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない
	実習後	非言語的訴えの確認	誠実に対応	忘れずに対応
患者に安心感を与える因子	看護婦前	非言語的訴えの確認	誠実に対応	忘れずに対応
	実習後	非言語的訴えの確認	誠実に対応	忘れずに対応
患者の人権を守るために必要なこと	看護婦前	正確な情報把握	確実な技術	スキンシップ
	実習後	正確な情報把握/スキンシップ	確実な技術	質問への的確に答える
専門職として看護婦に要求されるもの	看護婦前	正確な情報把握	スキンシップ/確実な技術	平等に対応
	実習後	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	平等に対応
専門性を高めるために必要なこと	看護婦前	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	平等に対応/患者から逃げない
	実習後	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	人間への関心/自分の看護観を持つ
専門性を高めるために必要なこと	看護婦前	専門的な知識と技術	知識や技術の向上	人間への関心
	実習後	専門的な知識と技術	知識や技術の向上	知識や技術の向上
専門性を高めるために必要なこと	看護婦前	人間への関心	人格と感性を磨く	やる気を自ら見出す
	実習後	評価をしながら実践する	人格と感性を磨く/学習の継続	学習の継続

表4 B学生とD看護婦の上位3位の比較

質問項目	順位	1位	2位	3位
看護婦の機能	看護婦	心理的援助	身体的援助	患者教育
	実習前	身体的援助	心理的援助	患者教育
	実習後	心理的援助	身体的援助	患者教育
看護婦が関わる健康水準	看護婦	疾病の治療・回復	終末期	健康の保持・増進
	実習前	疾病の治療・回復	健康の保持・増進	終末期
	実習後	疾病の治療・回復	健康の保持・増進	終末期
看護婦に必要な知識	看護婦	看護の方法・技術	患者の心理理解/疾患	疾患
	実習前	患者の心理理解	看護の方法・技術	看護の方法・技術
	実習後	患者の心理理解/疾患		
看護技術に求められるもの	看護婦	安全性	正確さ	安楽性
	実習前	安全性	安楽性	正確さ
	実習後	安全性	安楽性	正確さ
看護婦に求められる資質	看護婦	やさしさ	温かさ	明るさ
	実習前	温かさ	明るさ/親しみやすさ	
	実習後	やさしさ/温かさ		
看護婦に求められる態度	看護婦	冷静さ	誠実さ	感受性/自己の健康管理
	実習前	冷静さ/感受性		正直さ
	実習後	自己の健康管理	誠実さ/感受性	
看護婦に求められる素質	看護婦	責任感	親切心	献身的態度
	実習前	責任感	親切心	献身的態度
	実習後	責任感	親切心	ゆとり
患者への対応	看護婦	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない/自動に責任を持つ
	実習前	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	自動に責任を持つ
	実習後	患者の話をよく聴く	笑顔での対応	押しつけない
患者の訴えに対する対応	看護婦	非言語的訴えの聴解	誠実に対応	迅速に対応
	実習前	非言語的訴えの聴解	忘れずに対応	誠実に対応
	実習後	非言語的訴えの聴解	誠実に対応	忘れずに対応
患者に安心感を与える因子	看護婦	正確な情報把握	スキンシップ	確実な技術
	実習前	正確な情報把握	スキンシップ	確実な技術
	実習後	スキンシップ	正確な情報把握	確実な技術
患者の人権を守るために必要なこと	看護婦	守秘義務の厳守	平等に対応/自己決定権の尊重	
	実習前	守秘義務の厳守	自己決定権の尊重	患者から逃げない
	実習後	守秘義務の厳守	平等に対応	自己決定権の尊重
専門職として看護婦に要求されるもの	看護婦	専門的な知識と技術/知識や技術の向上		自分の看護観を持つ
	実習前	人間への関心	専門的な知識と技術	知識や技術の向上
	実習後	知識や技術の向上	自分の看護観を持つ	専門的な知識と技術
専門性を高めるために必要なこと	看護婦	評価をしながら実践する	人格と感性を磨く	学習の継続
	実習前	人格と感性を磨く	評価をしながら実践する	学習の継続
	実習後	評価をしながら実践する	人格と感性を磨く	学習の継続

げない"に変わって、実習後は"平等に対応"があがっていた。また、「専門職として看護婦に要求されるもの」では実習前は"人間への関心"が最も多かったのに実習後は上位3位に入っておらず、かわりに"自分の看護観を持つ"が2番目に多くあげられていた。

B学生の実習前、後における項目の内容の割合を比較した結果、図2に示す通り、「看護婦に求められる態度」の"自己の健康管理ができる"が実習後の方が実習前に比べ χ^2 検定5%水準で有意に高かったが、「患者の訴えに対する反応」の"迅速な対応"は有意に低かった。また、「専門職としての看護婦に要求されるもの」では"人間への関心を持つ"、"専門的な知識と技術"について実習後の方が実習前に比べ有意に低かったのに対し、"自分の看護観を持つ"は実習後の方が有意に高かった。

上位3位にあげられたものが、実習前、後で二校に共通して変化していた項目は、「看護婦に求められる資質」と「看護婦に求められる素質」であった。

2. 学生と看護婦の「看護婦として重要なこと」の認識の比較

看護婦の上位3位に挙げられたものは表3、表4に示す通りであり、二施設間で異なっていたのは「看護婦に求められる素質」としてC看護婦では"ゆとり"があげられていたのに対し、D看護婦では"献身的態度"があげられていた。そして「患者の訴えに対する対応」にC看護婦では"忘れずに対応"があげられており、D看護婦では"迅速に対応"があげられていた。また、「専門性を高めるために必要なこと」ではC看護婦は"やる気を自ら見出す"を、またD看護婦は"学習

の継続”をあげていた。

学生と主な実習施設の看護婦の各項目の上位3位を比較すると、表3に示す通り、A学生とC看護婦では、実習前は「看護婦が関わるべき健康水準」「看護婦に求められる資質」「看護婦に求められる素質」「患者に安心感を与える因子」「専門性を高めるために必要なこと」の5項目に違いが見られたが、実習後は「看護婦に求められる資質」と「専門性を高めるために必要なこと」の2項目以外はC看護婦との違いはなかった。

一方、B学生とD看護婦では、表4に示す通り、実習前は「看護婦に求められる資質」「看護婦に求められる態度」「患者の訴えに対する対応」「患者の人権を守るために必要なこと」「専門職として看護婦に要求されるもの」の5項目に違いが認められたが、実習後では「看護婦に求められる素質」と「患者の訴えに対する対応」の2項目だけに違いが認められた。

IV. 考察

今回の結果では、看護の機能や看護婦に必要な知識並びに技術について重要と思うことに学生と看護婦では差が無かった。役割や機能によって必要とされる知識や技術は異なることから、「看護の機能」、「看護婦に必要な知識」、「看護婦に必要な技術」は関連があることが考えられる。そして、学生も看護婦も施設の違いに関わらず、看護婦の役割については共通の認識を持っていることが分かった。また、2つの病院の看護婦の「看護婦として重要なこと」として上位3位に挙げられたものが異なっていた項目は「看護婦に求められる素質」、「患者の訴えに対する対応」、「専門性を高めるために必要なこと」であった、これらの項目の違いは、「献身的態度」や「忘れずに対応」といった内容から土地柄や病院機能の違いによってもたらされたものではないかと考える。

学生の実習前後で二校に共通して変化していた項目は、「看護婦に求められる資質」と「看護婦に求められる素質」であった。「看護婦に求めら

れる資質」として実習前は“温かさ”や“親しみやすさ”があげられていたが、実習後は“明るさ”や“やさしさ”があげられていた。患者の多くが望んでいたのは“明るく笑顔で接する”ことや“やさしさ”であった¹³⁾ことから、患者と実際に接することによって、看護学生の認識が患者に近いものに変化していったものと思われる。また、「患者が看護婦に求める素質」では二校共に実習前の“献身的態度”に変わって、実習後には“ゆとり”があげられていた。患者は多くの我慢を強いられており遠慮していることに看護婦は気づきながら、ジレンマを感じている。そして看護婦は常に患者の声に耳を傾けるゆとりを持ちたいと考えており、それがケアの質の向上につながると考えている¹⁴⁾。この結果から学生も実習によって看護婦と同様の考えを持ったことが推察できる。

A学生では「看護が関わるべき健康水準」の上位3位に実習前では“社会復帰”があがっていたが、実習後は“終末期”に変わっていた。看護婦の基本的責任は、人々の健康を増進し、疾病を予防し、健康を回復し苦痛を軽減することである。実習前は講義等によって社会復帰に関わるという認識が高かったが、実習施設の患者の特徴として悪性腫瘍や終末期が多いことから“終末期”に変わったのではないかと考える。そして、それはC看護婦が“終末期”を2番目に多くあげられていたことから推測できる。終末期患者と接する時に患者、家族の苦しみや複雑な心理状況に看護婦自身が耐えきれない状況に追い込まれることがある。一方、患者はいつも医療者に訴えたいことを持っている¹⁵⁾。それが、「患者の人権を守るために必要なこと」として実習後に“患者から逃げない”が加わったことに関連しているのではないかと考える。「患者に安心感を与える因子」の実習前は“質問への確に答える”があがっていたが、実習後は“確実な技術”に変わっていた。日本看護科学学会では看護技術を看護の専門知識に基づいて、対象の安全・安楽・自立を旨とした目的意識的な直接行為であり、実施者の看護観と技術の習得レベルを反映する¹⁶⁾と概念規定している。こ

のことは患者と看護婦の間にどのような人間関係が成立するかは看護実践によってもたらされることを示している。C看護婦も“確実な技術”が重要と考えており、患者と看護婦の人間関係の成立に技術の習得レベルが反映することを実習を通して学んだ結果であると考える。

一方、B学生は、「看護婦に求められる態度」として実習後は“自己の健康管理”が実習前より有意に多くなり、第1位となっていた。D看護婦が“自己の健康管理”を重要と考えていることや学校側も臨地実習は出席することを原則としていることから実習後は健康管理が最も重要なこととしてあげられたものと思われる。「患者への対応」では実習後は“押しつけない”があがっていた。看護婦が良いと思って行ったケアが必ずしも患者のニーズを満たしているとは限らない。看護の質の保障とは最善の看護ケアを提供することを保証するためのプロセスを意味し、患者に対して行うケアとそれが患者にもたらす結果を常に吟味しながら、ケアをより良いものにしていく継続的な活動である¹⁷⁾。看護の質を保証するためにはケアの受け手である患者の評価は重要であり、患者のケアを通して患者に確認してケアすることの重要性を学生が感じた結果であると思われる。「患者の人権を守るために必要なこと」では実習前の“患者から逃げない”が変わって、実習後は“平等に対応”があがっていた。医療の場面においても様々な偏見等から必ずしも平等で最善の医療を受けられるとは限らない¹⁸⁾。患者は医療者に平等な対応を最も強く望んでおり¹⁹⁾、D看護婦だけでなく、A学生、C看護婦ともに“平等に対応”することを重要視していた。また、「専門職として看護婦に要求されるもの」では実習前は“人間への関心”が最も多かったのに対し実習後は“自分の看護観を持つ”が有意に多く、2番目に位置していた。「看護」のサブカテゴリーのひとつとして「人間」があることから、“自分の看護観を持つ”ことの中に“人間への関心”も含まれるのではないかと考える。

二校の学生共に実習初期は実習施設の看護婦と

「看護婦として重要なこと」の認識に違いが認められた。しかし、実習後には二校共に主な実習施設の看護婦と似たような認識に変化していた。看護学実習は対象者の健康レベル・生命現象・環境とのかかわり・行動変容の過程等を通して、統合し、深めていく授業である¹⁹⁾。また、看護業務や看護に求められるものは病院のもつ機能や規模ならびに患者の疾病の状態や社会・心理的、経済的状态によって変わってくる²⁰⁾。これらのことは、病院の機能によって対象とする患者や病院体制が異なり、そのことが看護婦の看護観、ひいては看護学生の看護観に影響を及ぼすことを示唆している。そのことはまた授業としての看護学実習を展開する場である実習病院の選択にあたっては、病院の機能や対象とする患者の特殊性を十分に把握し、考慮することが重要であることを示していると言える。

V. 結語

学習とは広い意味で人間が環境との相互作用を通して知識、概念、体系、認知構造などを獲得したり、組織化したり、再組織化することによって、新しい行動様式を身につけていくことである²¹⁾。本研究の結果、臨地実習によって看護学生の看護の価値観に変化がもたらされ、それぞれの主な実習病院の看護婦の価値観と似かよった価値観に変わっていることが示された。これらの変化は患者、家族や看護婦等様々な人々との関係の中でもたらされたものであり、ひとつだけの影響によってもたらされるものではないことは推察できる。そして看護実践の場は看護学生のみでなく看護婦の看護観にも影響を及ぼすことを示している。今回は看護婦に対する価値観の項目のみを比較したため、影響を及ぼす因子を具体的に明らかにすることはできなかった。今後はさらに臨床実習施設の看護婦の教育背景、地域性、看護体制等の違い等を詳細に検討して、臨地実習が看護学生の看護観の形成に影響を及ぼす因子について追究していく予定である。

謝 辞

お忙しい中、調査に快く御協力いただきました
A 短期大学と B 看護学校の 3 年生の皆様ならびに
C 病院と D 病院の看護婦の皆様へ深謝いたします。

文 献

- 1) 多羅尾美智代：看護部の皆さんへーやさしさとおもいやりとー，看護実践の科学，21(12)，76-80，1996
- 2) 菊池登喜子：実践能力を伸ばす，看護実践の科学，21(12)，35-39，1996
- 3) 森下節子他：態度教育の研究（2）一年齢・経験と共に発展する態度意識，看護展望，17(5)，62-68，1992
- 4) 辻本好子：患者とナースは向き合ってるか，看護展望，21(13)，18-21，1996
- 5) 野元久美子：患者も看護婦も満足する看護を目指す看護展望，21(13)，35-40，1996
- 6) 橋本智子：看護実践を支える看護観の育成，Quality Nursing，3(2)，22-27，1997
- 7) 前田ひとみ他：看護学生の看護概念の形成に関する研究（1）－【人間】の概念の変容－，熊本大学医療技術短期大学部紀要，8，17-27，1998
- 8) 渡邊裕美他：看護学生における「病院」，「患者」，「看護婦」，「看護」のイメージの変化－1 年次と比較して－，東北医短部紀要，5(2)，141-148，1996
- 9) 杉森みどり：看護教育学 第 3 版，p.241，医学書院，東京，1999
- 10) 堀秀志：臨床実習の意味についての一考察，Quality Nursing，4(2)，26-31，1998
- 11) 宇佐美千恵子，小澤道子：臨床実習指導者の指導意識と取り組み，看護教育，36(13)，1177-1183，1995
- 12) 嶋森好子：看護婦にとって良い病院が患者にとって良い病院となるか，看護，45(14)，6-11，1993
- 13) 大重和代他：【よい看護婦とは】に対する看護婦と患者の意識調査，平成10年度熊本大学医療技術短期大学部卒業研究，1-21，1999
- 14) 細内美子：キーポイントは「部長回診」，看護，45(14)，27-31，1993
- 15) 日野原重明：ターミナルケア－医師・ナース・家族の役割の相互理解について－，看護教育，28(3)，134-144，1987
- 16) 日本看護科学学会 看護学術用語検討委員会：看護学術用語，p.9，日本看護科学学会 第 4 期学術用語検討委員会，千葉，1995
- 17) 岡谷恵子：看護ケアの質評価の日本的展開，インターナショナルナーシングレビュー，18(3)，6-14，1995
- 18) 落合恵子：誰が医療の主人公か－over voices の権利の確立，看護，45(14)，102-109，1993
- 19) 前掲 6) p.241
- 20) 波多野梗子：系統看護学講座 基礎看護学（1）看護学概論 第12版，p.218，医学書院，東京，1997
- 21) 細谷俊夫他編：新教育学大事典 第 1 巻，p.349，第一法規出版，東京，1990